NO.37
'14 MAY

AQUA

2014年5月発行37号　すどう美術館
〒250-0853 神奈川県小田原市堀之内373
TEL.0465-36-0740　FAX.0465-36-0739
info@sudoh-art.com
http://www.sudoh-art.com

小田原アートホテル2014『わたしの一部屋』展を企画して

湘南アートベース（代表）朝比奈 賢

…なんだかやれそうな気がする…

と心の中で微かに針は振れ、その囁き声のような直感は最後まで胸の深い部分に横たわっていました。私はその感覚へ、ことあるごとに立ち戻り信じ続けました。

すどう美術館主催の小田原アーチストインレジデンス最終日、国内外の作家が滞在する「ホテルグリーン」のオーナー櫻井泰行さんから、「このビジネスホテルをつかってアートイベントをやりましょう！」と声をかけられました。ちょうどその頃、いつも身を切って若手作家を育てている須藤館長・副館長の恩に報いるには、お世話になっているだけではダメで、自分が主体となって行動していくしかない、と考えていました。その〈考え〉と〈直感〉が一致し、私はその場ですぐに「はい」と返答しました。

しかし、実際にアートイベントの企画をするということは、思っていた以上に大変なことでした。アイデアが面白いものでなければならないのはもちろんのこと、先に何が起こるかを想像する予測力、実現するための現実的な金銭感覚などが要求されるからです。どう決断していいか分からず、企画が暗礁に乗り上げそうになったとき、いつも先を見通している須藤夫妻は温かく手を差し伸べて下さいました。そしてその判断は常に、このイベントに参加する相手を本位に考え抜いたものであることに驚かざるをえませんでした。というのは、一般的に、人（自分も含めて）は大変な状況になればなるほど、無意識に自分本位な選択をしてしまいがちだからです。難しい状況でもゆとりと思いやりのある考え方に、改めてふたりの生き方の本質を見たように思いました。

すどう美術館をはじめとして、たくさんの方々にご協力いただき、『小田原アートホテル』はなんとか実現することができました。3月の3連休、老若男女問わず800人近くの来場者がありました。24名の作家がホテルに滞在し、空間を作りこむことで、敷居の高いギャラリーとは違う、各作家の部屋を訪ねて遊びに行くような、身近な関係が築けました。そこで生まれた多くの対話は、来場者と作家のどちらにとっても新鮮な発見をもたらしたようです。そのことは、アートホテル全体に漂うある種の高揚感から伝わってきました。そして、「楽しかった」「また是非やって欲しい」という多数のご要望を頂きました。予想以上に多くの作品を販売できたことも成果です。文化の裾野を広げるには日常にアートがかかせないからです。きっと気に入った作品を持ち帰って住まいに飾っていただけていることと思います。館長がいつもおっしゃっている『アートは心のごはん』という言葉を、すこしでも多くの方に実感していただくことができるよう、今後も活動をしていきたいと思います。

活動詳細はホームページ：
【検索】湘南アートベース

若き画家たちからのメッセージ展

すどう美術館 館長　須藤一郎

すでに多くの方に知っていただいておりますように、すどう美術館では館内でのいろいろな展覧会のほか、地方のギャラリーや障害者の施設、それに小学校などに作品を持って行っての「出前美術館」、日本のアーティストを世界に紹介する海外へのアートフェアーへの参加、海外、国内のアーティストを小田原に招待し、滞在中作品を制作していただく「アーティスト・イン・レジデンス」、そして東日本大震災の被災者の方々に少しでも心の安らぎを持っていただければとの考えから、現地にお伺いして展覧会やコンサートなどを行う「東日本げんきアートプロジェクト」などの活動をしています。

そしてもう一つ、若いアーティストにささやかながら支援をしたいとの思いから実施している「若き画家たちからのメッセージ展」があります。

公募展ですが、作品だけで選ぶのではなく、応募者全員に私が面接のうえ、出展を決めさせていただいています。作品だけが一人歩きするのではなく、展覧会をきっかけに、いろいろな人間関係ができていくことを望んでいるからで、面接では応募者から美術についての姿勢や考え方をお聞きし選ばせていただいています。

私は、作る人、見る人、そして私たち関わる人の中に作品があると思っています。

今年のこの展覧会は8月18日から始まりますが、事前の面接の関係もあり、6月末日が締切りです。出展する作品は面接の後に制作していただくという、ちょっとユニークな制度としています。

別添の募集要項のとおり今回が17回目となりました。多くの方に応募いただければと思いますので、自薦、他薦、どうぞよろしくお願いします。

点描　こんな話でよかったら (24)

仙仁司

かつては多くの人々に食された胡桃豆腐の話。滑らかで野生的な味の余韻を決して忘れることはない。どういう訳があってこうなるのか明確ではないが、文学を読んだり、音楽を聴いたり、美術作品を観た時などこの味を基準値に判断してきたような気がしている。

御袋の味、郷土山形の味であったが手間の掛かることもあり、いつの間にか食卓から消え、ある日突然、市販の胡桃豆腐が届いた時、その味の甘ったるさ、似て非なるものに愕然とした。あの懐かしい味を家族にも食べさせたいと思い、わが家の味を求めて何度も失敗を重ねてようやくこれだという味に到達するまで約2年。現在では何かがある時は食卓に上る定番になっている。レシピを紹介しますので是非一度チャレンジしていただければと思います。

材料 (1) 剥胡桃 160g　(2) 吉野葛 160g　(3) 三温糖大匙3杯　(4) 日本酒 50cc　(5) 薄口醤油小匙1杯

作り方

A　水700ccを沸騰させ (3)(4)(5) を加えて弱火に3分間かけた後65℃まで冷ます。

B　胡桃に熱湯を通しミキサーに入れAの汁を加え10分蒸らした後4分間ミキサーにかける。

C　(2) を200ccの水によく溶かしておいた鍋に、液状になった (1) を加え中火以下の火力にかけて粘りと手応えの出るまで練り上げ型に入れて約3時間冷ます。夏期は固まりにくいので冷蔵庫に入れる。生姜醤油をかけていただきます。

古い食文化をそのまま伝えている胡桃豆腐には何か大切な感性を育む栄養素が含まれているような気がする。

近頃、胡桃は健康食品として見直されているが胡桃豆腐こそ人と人を繋ぐおもてなしの秘策かもしれない。

白いノート 15

ある日の午後

先日、数年前に急逝された作家の奥様が、久しぶりに美術館に来て下さった。ちょうど、ご主人の20年ほど前の作品を展示していた。生前のことを色々とお話しする中で、その作品を制作されていた時のことを話してくださった。

当時、体調を崩しておられたご主人は、心身ともに厳しい状況であったにもかかわらず「作品を作ることで病気を治すんだ」と言われて、まさに命をそそぎこむような勢いで一心に制作に打ち込まれていた、と。そして、とうとうその執念で病気を治してしまわれたそうだ。

その頃の一連の作品は、すどう美術館にも数点保管されているが、どれも背筋がのびるような厳しさと強さがある。しかし威圧的な感じはせず、どこか楽しい気持ちになるくらいの優しささえ感じる。思い返すとそれは、作家ご自身の姿そのものだ。いつも厳しいことばで作品について語られていたが、そのなかに大きな優しさが感じられる方だった。

帰りがけに奥様が、玄関にかけられている作品を「少しながめてから行きます。」と言われたのが印象的だった。

髙橋玉恵

ギャラリィ無有斎の展覧会
江東区牡丹３－３２－２　TEL 03－3641－0747

宮塚春美 展
6月6日(金)～22日（日）金土日開催
11：00～18：00（最終日～17：00）
作家のことば
『こころの動きとイマジネーションと』
無有斉の浮遊感のあるスペースを生かした『場』を作りたいと思う。一枚ずつの断片がなにか反応を起こすような作品を作りたいと思う。
宮塚春美

カワシマトモエ 展
7月4日(金)～20日（日）金土日開催
11：00～18：00（最終日～17：00）
作家のことば
『空にりんごが浮かんでいたら』『ひつじの中に宇宙があったら』毎日を過ごしながら、違うチャンネルで物事を考えてみると新しい世界が見えてくる。そういう物に囲まれるといったいどうなるのか。自分から生まれるまだ見ぬ世界にわくわくしながら絵を描いたり工作をして制作してきました。初めての無有斎で私の作品がどんな表情を見せるのか楽しみです。
カワシマトモエ

すどう美術館セレクション展
6月17日(火)～7月6日（日）月曜休館
11：00～19：00（最終日～17：00）

石田徹也展開催

平塚市美術館学芸員　勝山 滋

作家にとってますます厳しい時代といわれるなかで、「若き画家たちからのメッセージ 2014」は貴重でユニークだ。作家にとって自作を見てもらう機会が必要であるし、出品し批評をうける経験は大きな糧になる。

現在平塚市美術館で開催中の「石田徹也展ーノート、夢のしるし」(～6月15日)を企画し、こうした思いを改めて強くした。石田は73年に焼津に生まれ、2005年に31歳で他界した画家である。一見多くの受賞歴に恵まれて見える石田だが、イラストレーション系からファインアート系へと進んだためか双方の世界から陰になってしまって、生前はカップラーメンで糊口をしのぎ海外で発表する夢を持ちながら早世してしまった。海外のギャラリストが嘆息し賛辞を送っているのを見るにつけ、なぜ生前に国内で評価がなされなかったのかと残念で仕方がない。

「若き画家たちからのメッセージ」には、こうしたジャンルの垣根がない。買い上げや展示の機会など作家の励みになるし、アカデミックな美術評論家が選定する賞でなく須藤一郎氏の矜持をもとに選ぶところに魅力がある。様々な角度から作家を発掘する可能性がふくらむからである。

さてこの作品は「引き出し」(1996年、静岡県立美術館蔵)という。サラリーマンに扮した石田が会社の机の引き出しを開けると、そこにはもう一人の石田が横たわっている。なんと引き出しは棺桶であって花が手向けられ、故人が好きだった車や電車のオモチャを納めている。なにを意味するのかと目を上に向けると彼の椅子に手をおく上司らしき人が見えてくる。左手の握りこぶしも威圧的だ。石田はサラリーマンの経験はないが、社会のなかで悩み苦しむ現代人をサラリーマンの姿に託して描いており、見るものの共感を得ている。こうした作品も、ある公募展での受賞をきっかけに描かれ、花開いたものだ。

受賞といえば、一般書店で販売されている石田徹也展の図録も美術館連絡協議会カタログ賞を受賞することができ、大いに励みになっている。展覧会で作品もごらんいただき、図録もお手にとっていただければ美術館人としてこのうえない喜びである。

8月にはすどう美術館でこれから花開く作家の作品を拝見できるひとときを持てることをいまから楽しみにしている。

公募 info

公募
第17回『若き画家たちからのメッセージ2014』展

応募者全員に館長が面接し、審査をして出展者を決めます。
(遠方の方で来館できない方は、作品資料で審査も可)
会期　2014年　8月19日(火)～31日(日)
展示会場　　すどう美術館（小田原）
作品　平面 立体 版画他 20号以下で1人2点以内(立体は応相談)
募集人員　　20名(30歳くらいまで)
申込締切　　2014年6月末日
すどう美術館賞として2点以内の作品を買い上げします。
受賞作家は後日、すどう美術館にて企画の展覧会を行います。
応募方法はTEL、FAX、メールにて面接日予約の上、募集要項についている申込書送付にて
(募集要項はホームページで掲載中)

副館長の入院

続く 世界一小さい美術館ものがたり

去る3月19日の未明、すどう美術館の副館長（私の妻の紀子）が倒れ、救急車で病院に運ばれました。くも膜下出血との病名で同日、8時間におよぶ手術が行われ、危険な状態でした。

しかし、数日後、思ったより早く、意識が戻り、多少の意思疎通が図れうれしかったのですが、この病気に起こりがちな頭の脳室に水がたまる水頭症の症状になり、再び意識が混濁し元気もなくなってしまいました。

水頭症には手術が必要とのことで準備が進められていましたところ、今度は心電図に異常があり、手術に先駆け心臓カテーテルの検査が行われたのですが、その結果、心筋梗塞が認められてその処置が施され、現在はなんとか落ち着いた状況です。ただ、そのために水頭症の手術は先に延びますので、長期戦の構えとなりました。

心強いのは手足に麻痺はなく、それが大事と考えているようで、毎食、自分の手で、病院の食事を全て食べていることです。副館長の病気を知った多くの方からご心配やいろいろご配慮をいただき、とても感謝しておりますが、あらためて現在の病状を皆さまに知っていただいた方がいいかと思い、ご報告することとしました。

今は半分はわかり、半分は夢や想いの世界におりますが、大勢の皆さまのお気持ちを受けて、紀子は必ず頑張って、もとどおりに復帰するものと私は信じ、見守っているところです。（5月10日）

須藤一郎

編集後記

複数の匂い
電子音
天井の模様
身を削ぎながら、
淡い時間が通り過ぎていきます
何も考えずに、全て無造作に束ねられ、植物が巻きつき、蔓の先が伸びていきます
その行先は、明るいおぼろですたくましい次世代の体温があります

徳澤姫代